ゼミナールⅠ「演劇の〈ことば〉を考える」

国際日本学部 日本文化学科 3年
宮崎 亜美

国際日本学部日本文化学科の深澤ゼミは、日本の伝統演劇から西洋の演劇まで、演劇そのものを研究対象とするゼミです。主な活動として、演劇に関する本を精読して演劇に対する理解を深めたり、実際に劇場に赴いて観劇したりしています。今年度は、河竹登志夫による『演劇概論』（東京大学出版会、１９７８）を使用書に定め、演劇を構成する本質的な要素について学びました。また、課外活動として、赤坂の草月ホールで行われた音楽座ミュージカル『ラブ・レター』、駒場のこまばアゴラ劇場で行われた第27班『ハヴ・ア・ナイス・ホリデー』という二作品を鑑賞しました。本報告では、『演劇概論』の精読と『ラブ・レター』の鑑賞という二つの活動についてまとめます。

『演劇概論』は、演劇を総合的に捉えた概論書です。内容は章ごとに分かれていて、演劇観の総論、演劇を構成する諸要素についての各論、日本と世界の演劇史について述べられています。今年度は演劇観の総論と演劇を構成する要素についての各論までの内容を中心に精読しました。ゼミでは、当日までに決められた範囲を読み、自分の考えや疑問をまとめておきます。そして、当日、自分の考えと先生の考えと照らし合わせたり、疑問について先生と討議したりしています。加えて、文中で登場した演劇の戯曲や関連する論文を読んだりもします。例えば、演劇分類について学んだ際には、具体例として登場したイプセンの『人形の家』を読みました。この活動によって、演劇に対する理解が深まるほか、文章を批判的な態度で読む力や戯曲を読む力が身に付きます。

「音楽座ミュージカル」（於：赤坂草月会館）観劇のあとで

音楽座ミュージカル『ラブ・レター』は、原作である浅田次郎の短編小説をミュージカル化した作品です。この作品は人とのつながりを繊細に描いていて、舞台上で役者たちが紡ぐストーリーには心を揺さぶられました。観劇を終えた後は、それぞれの印象に残ったシーンや工夫されていたと思うシーンなどを話し合います。この意見交換は、自分にはない発想を聞くことができ、作品の理解を深めることにもつながるため、非常に充実しています。また、実際に劇場に赴いて観劇すると、演劇の一瞬性を肌で感じることができます。こうした経験は、研究室で本や論文を読んでいるだけでは得られないもので、演劇を研究する上で必要な経験だと私は思います。

以上、深澤ゼミの活動内容についてまとめました。演劇は扱えるテーマが幅広く、大変なこともありますが、先生が親身になって相談に乗ってくれるため、自分の興味関心に沿った研究に取り組むことができます。また、観劇など普段できない体験ができることもこのゼミナールの魅力です。

文献講読演習「曽我物語を読む」（担当教員：深澤徹）活動報告

２０２２年度の「文献講読演習」では、ＮＨＫの大河ドラマ「鎌倉殿の13人」にちなみ、半年かけて曽我の五郎・十郎の敵討ちを題材とした『曽我物語』のテキストを原文で通読しました。そのからみで、6月5日には一日かけて、舞台となった鎌倉の街をフィールドワークしました。『曽我物語』はまた、能や歌舞伎の「曽我もの」演目としてアレンジされてもいるので、7月10日には、演劇のメッカとして知られた下北沢の街の近くにある「駒場アゴラ劇場」で、劇団「第27班」による「ハヴ・ア・ナイス・ホリディー」という演目を鑑賞して、現代の演劇空間を体験しました。

これら二つの活動の後は、最寄りの飲食店で飲み食いしながら（コロナ感染拡大の前です）、楽しく振り返りの時間を持ちました。以下は参加者による、それぞれの体験記です。

＊　＊　＊

◆早坂葵　深澤ゼミでは曽我物語をテキストとして読み進めてきたが、視点を少し変えるだけで物語はその表情を変え、私達に新鮮な体験をさせてくれる。真名本や仮名本を読み比べながら、意見を交換し合う楽しさをこのゼミを通して学ぶことが出来た。実際に自分達の足で史跡を巡り、作品をより身近に感じていくことは物語を深く味わうことに繋がるのである。

私達は今回フィールドワークの一環として、こまばアゴラ劇場へと出向いた。鑑賞した芝居のタイトルは「Have a nice holiday」。とてもありふれた言葉に見え